

Title	胡祇適の詩と「捕蝗行」
Sub Title	Hu Zhiyu (胡祇適) 's poems and "Locust extermination"
Author	高橋, 幸吉 (Takahashi, Kokichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.2 (2022. 12) ,p.114 (143)- 128 (129)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高橋智教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230002-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

胡祇遹の詩と「捕蝗行」

高橋 幸吉

一. はじめに

胡祇遹（一二二七～一二九五）、字は紹聞、号は紫山。蒙元初期に活躍した文臣であり、儒學者である。その著作『紫山大全集』六七卷は現存二六卷ではあるが、王惲と竝んで蒙元初期の状況を知る資料として、歴史學の分野では廣く用いられてきた。しかし文學においては王惲と竝んでほぼ忽視されてきた人物である。本稿では王惲と竝ぶ金朝系知識人としてその詩を取り上げ、戦亂からの復興と民衆への關心を確認する。そして彼の特徴である寫實性が十二分に發揮された作品として「捕蝗行」を検討したい。

二. 胡祇遹の略歴

中國古典文學において人口に膾炙している人物ではないので、まずは彼の略歴を整理しておく。胡祇遹は金朝の名族の生まれであり、祖父胡景崧は金朝大定二五年の詞賦科狀元、父胡德珪も正大四年の進士という一族である。その來歴については元好問「朝散大夫同知東平府事胡公神道碑」^{〔1〕}に詳しい。先祖は威州（現甘肅省慶陽市環縣）の人で、高祖父が靖康の變に

より邯鄲付近の武安（現河北省武安市）に移った。先の元好問の神道碑から、定宗元年（一二四六）に父胡德珪は彰德府（現河南省安陽市）で出仕していることが確認でき、父の代からすでにモンゴル政権に仕えていた。中統年間に張文謙が大名府（現河北省大名縣）の宣撫となったときに、胡祇適は員外郎として迎えられ、これを契機に官途に就いた。その後フビライの幕僚として中書詳定官に遷り、至元年間には應奉翰林文字、太常博士などを歴任する。當時の權臣アフマと政策上で對立したために太原路治中に左遷され、以後は地方官として河東山西道提刑按察副使、荊湖北道宣慰副使、山東東西道提刑按察使を歴任する。その後翰林學士を拜命するも任官せず、江南浙西道提刑按察使となった。官途の大半を地方官として過ごし、中統三十年（一二八九）に没。死後禮部尚書と文靖の諡を追贈された。『元史』卷一七〇に立傳されている。

その能吏としての活躍は『元史』本傳のみならず、親友の王惲が何度も賞賛している。一方でその文學者としての側面や、『易解』三卷『老子解』一卷（いずれも現存せず）など、哲學面での造詣については『元史』本傳は全く言及していない。宋學や書法にも秀で、草創期の元曲についても批評を残している多藝多才な人物である。その別集『紫山大全集』六七卷は明代中頃までにはすでに完本が失われ、現在『四庫全書』所收の二六卷本は『永樂大典』から取り出して再編したものである。その内訳は詩七卷・文十二卷・雜著四卷・語錄三卷で、『四庫全書總目』は次のように評價している。

いまその文集を見ると、多くの學問は宋儒に由來している。篤實を尊ぶことで儒家の教えを明らかにし實際にこれを用いることに努め、空虚な議論を輕視している。詩文は胸中の思いをそのまま吐露し、模倣や字句に凝るところがなく、ただ論旨が明瞭で内容を讀者に伝えることを主としている。元代の詩人は往々にして風采と才華を重視し、このような衣食のような日常に根ざした詩文を得ることは、また中流の一柱「節義を曲げない不屈の物」である。ただ文集編纂時に多岐に渉る内容を採録しようとし、ついには俗流に應じた作も多く収録して頗る雜駁である。たとえば「黃氏詩卷序」「優伶趙文益詩序」「贈宋氏序」などの作品に至っては、道學を明らかにする人が倡優に狎れ親しむ言葉を成している。白璧の瑕であり、蕭統が陶淵明を譏ったことにとどまらないものがある。（今觀其集、大抵學問出於宋儒。以篤

實爲宗、而務求明體達用、不屑爲空虛之談。詩文自抒胸臆、無所依仿、亦無所雕飾、惟以理明詞達爲主。元代詞人往往以風華相尚、得茲布帛菽粟之文、亦未始非中流一柱矣。惟編錄之時、意取繁富、遂多收應俗之作、頗爲冗雜。甚至如「黃氏詩卷序」「優伶趙文益詩序」「贈宋氏序」諸篇、以闡明道學之人、作嫖狎倡優之語、其爲白璧之瑕、有不止蕭統之譏陶潛者。」

現存する作品も確かに「布帛菽粟之文（日常に根ざした詩文）」が多く、王惲と同様に、胡祇適も地方官として視察した民衆の惨状や自己の職務自體を詩に残している。また中堅官僚としての政策提言も残している一方で、雜著や語録の名を冠している通り多岐に渉る話題と内容を含んでいる。だからこそ王惲『秋澗集』と並んで當時を知るために多方面の分野から資料として参照されているのである。王惲も雜多で取捨選擇が足りないというような批判をされているが、王惲の雜多さがかく記録に残して帝王の、もしくは後世の參考資料となることを企圖しているのに對し、胡祇適の場合はその色合いが異なる。その家柄もあつて、いわば金朝知識人の本流中の本流であり、金末の趙秉文や李純甫らの三教兼通と、理學北傳前後からの宋學受容を受け繼いでいる。一方で芝居や役者との親和性や多くの題畫詩など、多彩な興味の對象を別集中に綴っているがために、『四庫全書總目』から「頗る冗雜爲り」と批判されているのである。

役者とのやりとりや戯曲論については元曲初期の資料となっており、「黃氏詩卷序」では役者のあるべき九の要素について挙げた〈九美〉という重要な曲學の術語まで提唱している。舊金朝系士大夫中の名家に生まれ、蒙元初期に活躍した多才多趣味な人物というのが、胡祇適のおおよそのイメージであろうか。

三. 農民へのまなざし

胡祇適の文集は散逸したものを再編集しているので、その詩文の全貌は不明だが、少なくとも現存する『紫山集』では二六卷中の七卷が詩であり、その内訳は古詩四卷・排律及び律詩二卷・絶句一卷である。現存する限りでは古詩が半数以上を

占め、當時の社會を描寫した詩は古詩が圧倒的に多い。また絶句では現存一六八首の七言絶句のうち題畫詩が半數ほどを占め、これに墨跡や書狀等に題跋として書いた詩を加えると約百首が書畫や圖像に關する詩である。また七言絶句で多く見られる贈答詩や宴席での作がほとんど無いことも特徴的である。無論、當該ジャンルの部分が散逸した可能性はあるが、胡祇適詩の大まかな方向性が窺える。

胡祇適も親友王惲と同様に當時の荒廢した都市や村落に關心を向けている。兗州（現山東省濟寧市）の役所に宿泊した際の詩「兗州の廨に宿す（宿兗州廨²）」を見てみよう。

方城二十里

方城二十里

居民不十家

居民十家ならず

荒涼無肆市

荒涼として肆市無く

何者謂喧譁

何者か喧譁を謂はん

斷碑荆棘中

斷碑荆棘の中

欵傾見州衙

欵傾州衙を見る

白晝走狐兔

白晝走れる狐兔

牕戶灌莽遮

牕戶灌莽に遮ぎらる

循例聚父老

例に循りて父老を聚め

勸諭勤桑麻

桑麻に勤むることを勸諭す

俯首聽誨言

首を俯して誨言を聴くも

口従力不加

口従ひて力加えず

民時苟不奪

民時苟だ奪はざれば

學稼寧有差

稼を學ぶに寧ぞ差有らんや

種樹郭橐駝

種樹郭橐駝^{かくたくだ}

笑我辭浮誇

我が辭の浮誇なるを笑ふ

衆散日已夕

衆は散じて日は已に夕なり

庭槐鬧寒鴉

庭槐鬧がしき寒鴉^{さむ}

兗州は濟寧路に属し、漢人世公嚴氏の根拠地である東平府の南東五十キロメートルほどに位置している。この地を管轄する山東東西道提刑按察使を胡祇適が務めていた至元二二〜二五年（二二八四〜八八）、六十歳前後の作であろう。提刑按察使として兗州を視察し土地の父老を集めて勸農を布告した際の描寫である。詩は兗州州城の描寫から始まる。概數ではあるが兗州は城壁一周が二十里（約九キロメートル弱）の都市だという。城壁を完全に保存している都市として有名な平遙古城が一周約六キロメートルなので、平遙の面積の二倍以上の規模を持つ都市であった。これに對して住人が十世帯未満であるというのは完全に廢墟である。詩的表現として誇張を多分に含んでいることを差し引いても、當時の社會の荒廢ぶりが窺える。當然ながら店が建ち並ぶ市も無く、石碑は損壞し兗州の役所である州衙も傾いている。晝間から小動物が走り回り、窓や扉は生い茂った草が蔽っている。金朝が減んですでに四十年あまり、フビライの即位から二十年以上経っても、華北の地は依然として復興にはほど遠い。このような状況でも胡祇適は例に従って當地の父老を、おそらくは州衙の中庭に集め、農桑にいそしむべき事を型どおりに布告するも、父老たちは口では従うのみで力なくうな垂れて聞いている。彼は「適時に農事をおこないその時期を亂さなければ、農作に努めることに各人差は無いだろう。柳宗元が傳書いた郭橐駝がもし私の言葉を聞いたならば、うわべだけの空疎な内容を笑うだろう」と胸中を獨白する。父老たちが歸るとすでに夕方となっており、庭の槐の木では鴉が騒がしく鳴いていて、空しさや不安定な心理を暗喩する景色をもって詩の結びとしている。

主題や描寫、そして官吏としての無力感の吐露は王惲「憫雨行」と同様である。當時提刑按察使や按察副使を務めた地方

官たちは多かれ少なかれ同様の状況に直面していたのであろう。父老との會話では無いものの、現場の下級官吏とのやり取りで荒廢した國土に言及する「潭口の驛に宿す（宿潭口驛）」でも同様の状況を述べる。

…（前略）…

借問少人烟 借問す少き人烟

無人來卜築 人の來たりて卜築すること無きを

亦匪逃移多 亦た逃移の多きに匪す

國初殄兵毒 國初兵毒に殄る

休養生息恩 休養生息の恩

百年不易復 百年復すること易からず

側耳聞斯言 耳を側てて斯の言を聞き

無寐到天旭 寐ること無く天旭に到る

逃散して他所に行ったのでは無く、金末元初の戦亂で人口が激減し、恢復に長い時間がかかることに言及している。そして地方を巡察する中堅官僚としての胡祇適は、現場の聲に耳を傾けつつも、有効な對策を提示することも出來ず思い悩み、悶々として寢付けず朝を迎えるのである。

また農政と農民への關心は、當然ながら天候への關心としても現れている。胡祇適の詩にも天候を農作や養蠶と關連付けて言及する例が多い。「時なるかな八月の雨、麥を種へて常年に倍す。謬りて勸農の責に當たり、踴躍喜びて眠れず。…（中略）…一雨民の憂ひを解き、執綏華軒に愧ず。（時哉八月雨、種麥倍常年。謬當勸農責、踴躍喜不眠。…一雨解民憂、執綏愧華軒。）」（卷一「秋旱民は麥の晩きを憂ひ、八月二十汶上に至りて雨を得、沾ひ足ること終日にして夜に達す」と

干天の慈雨を喜び、一方で勸農の責務を負いながら自分の力ではどうにもならなかったのに官僚として豪華な馬車に乗っている自分を恥じている。また「雨あめらざれば夏に麥無く、久しく雨れば秋の禾を傷やぶふ。六氣良に調すること難く、水旱何ぞ恒に多し。霖霖五晝夜、陸地は江河と成る。早穀未だ登場せず、穂は黒く芽は科と成る。(不雨夏無麥、久雨傷秋禾。六氣良難調、水旱何恒多。霖霖五晝夜、陸地成江河。早穀未登場、穗黒芽成科。)(卷一「苦雨嘆」と長雨を嘆く詩もある。⁷⁾ 早天や霖雨を題材にした詩は多々あるが、これを農作物の收穫と関連づけて詠うか否かは、作者の社會的立場や意識と大きく關係すると言えるだろう。

四、「捕蝗行」について

同様に當時の農民たちを描いた詩に「捕蝗行」(卷四「捕蝗行」并序⁸⁾)がある。本詩は至元六年(一二六九)に大蝗害⁹⁾に對処する農民たちの姿と驅除の光景を描いた全三八句の七言古詩であり、作詩の背景を述べた序文とともに當時の様子を生々しく傳えている。

至元六年、北は幽・薊自り、南は淮・漢あたに抵り、右は太行、左は東海、皆な蝗なり。朝廷は使ひを遣り、四出して掩捕し、僕は命を奉じて濟南に來、前後凡そ百日にして絶へ、故に是の詩を作る。(至元六年、北自幽薊、南抵淮漢、右太行、左東海、皆蝗。朝廷遣使、四出掩捕、僕奉命來濟南、前後凡百日而絶、故作是詩。)

現在の地理で言えば南北は河北省・遼寧省邊りから淮河・漢江邊りまで、東西は黃海沿岸から太行山脈までの廣範圍で蝗が暴れ回ったことになる。當時胡祇適は燕京で奉職しており、故に「命を奉じて濟南に來」たと言うのであろう。地方官に轉出するのが至元十一年、この地を管轄する山東東西道提刑按察使に任じられるのは至元二十一年と後年のことである。以下、内容に従って適宜分段しつつ、本詩を見てみよう。

老農蹙額相告語

老農蹙額して相ひ告げ語る

不憚捕蝗受辛苦

「蝗を捕へ辛苦を受くるを憚らず。

但恐妖蟲入田中

但だ恐る妖蟲の田中へ入り

綠雲秋禾一掃空

綠雲秋禾一掃して空しうするを

敢言數口懸饑腸

敢へて言ふ數口饑腸を懸くと。

無秋何以實官倉

秋みのり無くば何を以て官倉を實たさん」と

書き出しは老農の言葉から始まる。村を取りまとめる社長であろうか。「驅除の勞苦は構いません。蝗が作物を食い荒らすのだけが怖い。餓えた體でも敢えてやりましょう。秋の實りが無ければどうやって年貢を納めてお上の倉庫をいつぱいにするのができましょう」と言うが、これは胡祇適の創作の色が強い。すでに食物が欠乏し自分たちが餓えているのに、官倉を心配するのは些か不自然な潤色であろう。だが前述した「兗州の廩に宿す」詩のように土地の父老と接する機會はあったので、實際に會話した可能性は充分にある。

奚待里胥來督迫

奚ぞ里胥の來りて督迫するを待たん

長壕百里半夜擲

長壕百里半夜に擲る

村村溝塹互相接

村村の溝塹互ひに相ひ接し

重圍曲陷仍橫截

重圍曲陷かき仍ねて橫截す

女看席障男荷鍤

女は席障を看男は鍤せうを荷ぎ

如敵強賊須盡殺

敵の如き強賊須く盡殺すべし

そして現地の農民たちが「役人が驅除の督促に来るのを待つまでも無い」と自發的に立ち上がる。以下、當時の驅除の様子がつぶさに描寫されていく。まず夜中のあいだに長大な塚を掘る。群生相となり集團で移動する蝗（トノサマバッタ）は日の出からしばらくしてから離陸し日中に飛行するので、蝗が休止している夜のうちには驅除の準備を始めるのである。村々で掘った塹壕が互いに繋がり、曲がりくねった塚が何重にも横に阻む。「横截」の解釋が難しいが、村落への蝗の侵入を阻むのが目的であるから村落を囲むように堀を巡らしているのであろう。これを詩人いる村から見ると「横に貫く」という表現になったと思われる。「席障」は席で作った屏風、幔幕。管見の限り同時代までに用例が無く、時代が下るが明・王徴の『諸器圖說』『風磴圖說』に風で回る石臼（風磴）の圖とともに「堅木を框（枠状のもの）と爲し、中に十字の木根（木の棒）を加へ、一面に席障の邊を用ひ、皆な索を以て之を連ぐ（堅木爲框、中加十字木根、一面用席障之邊、皆以索連之）」とある。⁽¹²⁾ 女たちが蓆旗を持つて蝗を塚へはたき落とし、男たちが鍬（土を掘る農具）で潰して驅除する、蝗を皆殺しにしようとその時を待っている。

鼓聲摧撲聲不絶

鼓聲摧撲聲絶へず

喝死豈容時暫歇

喝死^{えつし}豈に時に暫し歇^{やす}むことを容れんや

枯腸無水煙生舌

枯腸水無く煙は舌に生じ

赤日燒空火雲裂

赤日空を燒き火雲裂く

汗土成泥塵滿睫

汗と土とは泥と成り塵は睫に滿ち

上下杵聲如搗帛

上下の杵聲帛を搗く如し

十三句目で場面が一轉し、蝗を驅除する情景を描寫する。志氣を高める太鼓の音が響くなか、蓆ではたき落とされた蝗を

聲を上げて粉碎し續ける。「喝」は暑さに中あたること。「喝死」でいわゆる熱中症か。夏の暑さで熱中症氣味になろうとも、休むこと無く驅除し續ける。餓え渴いた體には水もなく舌から煙が出そうなくらいで、その上をガラガラの太陽が照りつけている。汗と土で泥となり巻き上げた土埃が睫毛いっぱいに付着し、上下して打ち付ける杵の音は絹を搗うているようである。詩としての比喩表現を交えつつ、驅除の様子を生き生きと描寫している。

一母百子何滋繁

一母百子何と滋繁なる

聚如群蟻行驚湍

聚まること群蟻の如く行くこと驚湍のごとし

嘉穀一葉忽中毒

嘉穀一葉忽ち毒に中り

芄芄枝榦皆枯乾

芄芄ほうほうたる枝榦しかん皆な枯れ乾く

ここで蝗自體の描寫へと轉じる。一匹から無數の子が生まれることや、これが蟻のように集まって急流のような速さで移動して植物を枯らしてしまう。蝗害の描寫はすでに白居易以降散見するので、驅除の情景描寫ほどの新味はない。ここまでは農村における驅除の現場での描寫で、いわば前半と言えるだろう。後半は現場を離れて政治的、歴史的、社會的側面へと言及していく。

無乃民勞吏無德

乃ち民は勞め吏は德無きに無からんや

可能百郡俱貪殘

可能百郡俱に殘を貪るならむ

廟堂調變亦有道

廟堂の調變亦た有道なるも

胡爲凶孽來相干

胡ぞ凶孽が爲に來たりて相ひ干らん

聖躬愛民夜坐起

聖躬民を愛し夜坐して起き

遣使日馳參百里

遣使日に馳ること參百里

太宗吞蝗那可比

太宗蝗を吞むも那ぞ比ぶる可けんや

願隨時雨俱爲水

願はくば時雨に隨ひて俱に水と爲らんことを

そして胡祇適の胸中は政治へ思いを巡らせていく。民衆は頑張っているのに官吏に徳が無いのということはないか、おそらく多くの郡の行政や官吏は貪欲凶悪なのではないか、と。「調燮」は陰陽を調和させること。陰陽を調和し國を治める宰相を言う。朝廷にいる宰相は公明正大な政治をおこなっているが、蝗害のために現地に来て關與することなど、國全體を預かる身としてどうして出来るだろうか。皇帝陛下は民を愛し、おもんばかって夜も寝られず、使者である私を一日三百里の速さで走らせてこの濟南に派遣した。第二九句の「太宗吞蝗」とは、『舊唐書』に見える李世民の故事。蝗に關する典故としてよく用いられる。唐の太宗が蝗害に際して蝗を食べてまじないをしたことは有名だが、我が聖上に比べるべくもない。まじないなどでは無く、特使を派遣して現場で驅除をやらせているのだから。雨が降って蝗たちが流されて水になってしまふことを願うばかりである。

誰憐粒食誠艱食

誰か憐まん粒食の誠に艱食なるに

螟螣蝻賊口中得

螟螣蝻賊口中に得るを

土戰勤勞血戰憂

土戰勤勞血戰の憂ひ

田家一飽豈易求

田家の一飽豈に求むること易からんや

續いて胡祇適自身の感想を述べる。糧食の欠乏など不憫に思わず、蝗が口の中に飛び込んできても必死に戦う。少々農民たちを美化した感想かも知れない。「誰か憐まん」とはいうものの、當の農民たちにとって蝗害と饑饉は死活問題である。

螟螽と蝻賊は『詩經』小雅「甫田」に見える語。いずれも苗を食べる害虫。第三三句目の「土戰」は胡祇適の本詩以外、管見の限り用例が無い。土まみれになって蝗の驅除を行うことを言うのである。農民たちは土まみれになって勤勉に驅除に努めるが、血で血を洗うような厳しい戦いになることを心配している。農家がひとたび満腹になるほど作物を生産するのは簡単なことではない。

今冬斗粟直三錢

今冬斗粟三錢あたひに直し

力廻凶歳成豐年

力とめて凶歳を廻かへ豐年と成す

公私倉廩兩充盈

公私の倉廩ふた兩つながら充盈し

大車小車輪邊兵

大車小車邊兵はじを輸ぶ

最後にこの驅除が成功したことを述べて本詩を結ぶ。今年の冬は粟が一斗で三錢となり、凶作の年に努力してこれを豊作にすることを達成した。三錢という數字は概數であると思われるが、いずれにせよ粟や穀物の價格が豊作で安價になったことを意味する。そして故人や官有の貯蔵庫は穀物で満たされ、大小の車が邊境警備の兵士を運んでいく。至元六年（一二九六）は南宋を攻撃中であり襄陽を包囲中なので、この邊兵とは對南宋戦にかり出された兵士であろう。

最後の一句はどのように解釋すれば良いだろうか。「せっかく蝗を驅除して豊作にしたのに、また戰場へとかり出されて行く」という農民への哀れみを吐露したものか、「食料を確保して兵站を支えるから、早く南宋を平定して平和をもたらしてくれ」という願望であろうか。胡祇適の他の詩、前掲の「兗州の廨に宿す」や「潭口の驛に宿す」、「秋旱、民は麥の晚きを憂ひ、八月二十汶上に至りて雨を得、沾足終日、夜に達す」などを見ると、疲弊した農村の現状を熟知しており、やはり農民への哀れみと見るべきであろうか。

だが本詩は中盤で皇帝フビライを褒め稱え、「唐の太宗は蝗を飲み込んだただだが、陛下は使者を使わして具體的行動を

起こしているぞ」と持ち上げているので、對南宋戦に對する批判は憚られたのだと思われる。當時の都市や農村の慘狀を詩にするのは客觀的事實を描寫したに過ぎないが、國家として行っている、おそらくは目下の至上命題である南宋攻略に對して否定的な言辭を述べることは難しかったのであろう。そのため最後の一句に繋がる内容の詩句が無いまま、唐突な結びとなっている感がある。

さらには『元史』『五行志』の記述では、この蝗害は至元八年まで續いたとあり、本當に「凶歳を廻へ豊年と成す」ことが出來たのだらうか。『元史』では東平から發生したとあるので、蝗害が山東半島から他の地域に移動し、胡祇適が派遣された濟南では豊作に轉することが可能だったのか。史書の記述を參照するといささか疑問である。本詩の白眉はやはり、蝗を驅除する場面を臨場感豊かに描寫した一段であらう。

五. おわりに——捕蝗詩の系譜

蝗の驅除をいう捕蝗という語は、上奏や制誥などの政治的な文書では頻出するが、詩句としての用例は少ない。『全唐詩』『全宋詩』を閲しても管見の限り七例のみである。

一首は同時代の南宋林景熙の用例なので、胡祇適に先行する例は六例となる。捕蝗を詩題として主題とした例となるときらに少なく、胡祇適以前に現存するものは三例しか無い。しかしこのうち二例が白居易「捕蝗長吏を刺るなり（捕蝗刺長吏也）」と歐陽脩「朱棗の捕蝗詩に答ふ（答朱棗捕蝗詩）」ということは注目すべきであらう。だが本詩の視点は先行する二首と大きく異なる。それは彼らと胡祇適との、時代や立場の違いを如實に反映している。白居易は蝗を驅除することの無益さを説き「捕蝗捕蝗竟に何の利か、徒らに饑人をして重ねて勞費せしむ。一蟲死すと雖も百蟲來たる、豈に人力を將て天災を定めんや。（捕蝗捕蝗竟何利、徒使饑人重勞費。一蟲雖死百蟲來、豈將人力定天災。）」と述べる。そして「我は聞く古の良吏は善政有りて、政を以て蝗を驅ひ蝗は境を出ず（我聞古之良吏有善政、以政驅蝗蝗出境）」と、いわば天人感應説を採って、政治が悪いから災害が収まらないという立場である。故に當該の詩を社會風刺の内容を持つ風諭詩に自ら分類し

ている。一方歐陽脩は「官書立法空しく太だ峻し、吏は愚にして罰を畏れ反て自ら欺く。蓋し十を藏し一を申すも敢へてせず、上の心は惻むと雖も何に由りて知らんや。（官書立法空太峻、吏愚畏罰反自欺。蓋藏十不敢申一、上心雖惻何由知。）」と述べる。政府の文書や法律は厳しすぎて、現場の小吏は罰を恐れてしまい逆に虚偽の報告をする。ほぼ全て隠蔽してしまい、十にひとつも敢えて報告しないという現場の状況を指摘している。また詩の結びでは「官錢二十一斗を買ひ、示すに明信を以てすれば民は爭馳せん。（官錢二十買一斗、示以明信民爭馳。）」と、驅除した蝗の政府による買い取りという、具體策を提案している。爲政者としての大局的な視点に立った意見だと言えるだろう。これに對し胡祇適は實際の驅除現場に赴いてこれを描寫しており、三者の立場と關心の所在が明確に異なっている。紙幅の都合もあり、白居易・歐陽脩の捕蝗詩との詳細な比較検討については稿を改めて論じたい。

やはり胡祇適の本詩の特徴は、その臨場感と民衆へのまなざしであろう。中央からの使者である胡祇適は、無論驅除作業のあいだ現場の最前線にずっと居たわけでは無い。だがこの詳細な描寫は、驅除準備にいそむ村落を實際に訪れて、蝗害に立ち向かう人々と實際に接したからこそのものである。蝗害は個人の文集中において散文、特に上表文などに頻出する。また史書にも頻出する語であるが、當時の民衆がどのように蝗を驅除していたかを詳述することは少ない。さらにはこれを詩の題材とし、當時の農民たちの姿を生き生きと描き出したことは特筆すべきことであろう。胡祇適には本詩のあとに「後捕蝗行」という詩もあるが、本詩のような臨場感はなく、蝗害の様子を描寫することが主になっていて、「捕蝗」の描寫は數句にとどまる。

親友王惲と同様に、胡祇適は農民などの民衆と直接對話し、これを詩の題材とし、觀念的なものではなく實體験として經世濟民を希求する。蒙元初期に地方官を經驗した人々の詩文に共通して見られる傾向であるのか、胡祇適と王惲の二人だけに見られる特徴であるのか、今後の課題としたい。

- (1) 『元好問全集』第三五三頁（三晉出版社、二〇一五年）
- (2) 以下、胡祇適の詩は魏崇武・周思成校點『胡祇適集』吉林文史出版社、第十七頁、二〇〇八年版に拠る。以下、書名と頁数のみを示す。
- (3) 拙稿「王惲詩に現れる農民——喪亂詩を繼ぐもの——」参照。『中國研究』第十三号所収、二〇二〇年。
- (4) 『胡祇適集』第二十頁。
- (5) 『胡祇適集』第十二頁。
- (6) 『胡祇適集』第十二頁。
- (7) この二首、前者の詩題には「汶上」という兗州のすぐ北西に位置する地名があり、後者は詩中に「山東百餘城」という詩句があるため、いずれも山東東西道提刑按察使在任時の作であろう。
- (8) 『胡祇適集』第十六頁。
- (9) 蝗害は至元二年に益都（現山東省青州市）で始まり、その後この地域で斷續的に發生している。本詩が題材としている蝗害は前年六月に東平で發生し、至元八年まで三年間續いた。（『元史』卷五十一「五行志」一）
- (10) 元朝は五十戸を一社とし、農事に秀でた老人を社長として農村行政の末端を擔わせた。『元史』卷九三「食貨一」農桑の項を参照。
- (11) 國際連合食料農業機關（FAO）駐日連絡事務所HP、サバクトビバッタ Q&A 参照。
<http://www.fao.org/japan/portal/sites/desert-locust/desert-locust-qalen/> 二〇二二年九月十七日閲覧。サバクトビバッタはトノサマバッタと同様に群生相となり、北アフリカ・中近東・インドなどで蝗害を起こす。
- (12) 明・王徵『諸器圖說』「風磑圖說」、「四庫全書」本。
- (13) 古くから蝗は魚が水中で變化して發生すると考えられており、『藝文類聚』卷一百「蝗」にも「是れ魚子の水中に在りて化して之と爲ると云う（云是魚子在水中化爲之）」とある。故に發生元の水となって流れ去れという表現となっている。
- (14) 顧學頤校點『白居易集』第六五頁、中華書局、一九九九年版。
- (15) 李逸安點校『歐陽脩全集』第七五二頁、中華書局、二〇〇一年版。
- (16) 『胡祇適集』第六七頁。